

アクティブ・ラーニングに対する不安を持つ教師の変容に関する

事例的研究

○藤田 純祈 (上越教育大学教職大学院)

○米田 優衣 (上越教育大学教職大学院)

西川 純 (上越教育大学教職大学院)

(j2756481@myjuen.jp)

要約

本研究の目的は、2点ある。1つ目はアクティブ・ラーニングに対して教員はどのような不安を持つのか明らかにすることである。2つ目はアクティブ・ラーニングに取り組む教員はどのように変容するのかを明らかにすることである。高等学校の教員が抱く、アクティブ・ラーニングに対する不安の多くは、教授に関するものが最も多く、次いで生徒の人間関係に関するものが多かった。アクティブ・ラーニングに取り組む教員は、生徒の有能性を実感することで、教師主導時間が短くなり、生徒活動時間が増えることが明らかとなった。

キーワード：アクティブ・ラーニング、高等学校、不安、子どもの有能感

I 問題の所在

文部科学省(2014)は、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連して、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆる「アクティブ・ラーニング」)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があるとしている¹⁾。

アクティブ・ラーニングの一つとして、西川の提唱する『学び合い』がある²⁾。西川(2010)によると『学び合い』は、「学校は、多様な人とおりあいをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有用性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場」であるという学校観、「子どもたちは有能である」という子ども観、「教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備で、教授は子どもに任せるべきだ」という授業観の3つの考え方が基本となる授業である³⁾。

岩崎ら(2008)は、『学び合い』において、教師が抱く不安は教授に関するものが多く、その中で、まとめをしないことに対する不安が多数であることを明らかにした⁴⁾。

また、山田ら(2007)は、教師が子どもの有能性を実感していくことで、教師主導型授業から子ども主体型授業へと授業スタイルが変化していくこ

とを明らかにした⁵⁾。

いずれの研究も、小学校教員を対象としたものであり、高等学校の教員を対象としたものは見当たらない。本研究では、高等学校の教員がアクティブ・ラーニング導入にどのような不安があり、どのように授業スタイルや、授業に対する思いが変容していくのかを明らかにする。

II 研究目的

本研究の目的は、高等学校においてアクティブ・ラーニング導入による不安と、アクティブ・ラーニングに取り組み始めた教員の授業や意識の変容を事例的研究として明らかにする。

III 研究方法

1 調査対象

N県A高等学校教員59人

日本史担当B教諭

2 調査時期

2016年9月～11月

3 調査方法

・ビデオカメラを教室の前後に2台配置し、授業の様子を記録した。

- ・教員との授業リフレクションでの会話を、ICレコーダーで録音し、記録した。
- ・アンケート調査をおこなった。

4 分析方法

- (1) A 高等学校職員 59 名にアクティブ・ラーニングに対する不安のアンケート調査を行なう。質問項目は岩崎ら (2007) ⑥の質問を 2 点置き換え、使用した。

「アクティブ・ラーニングを実践する場面を想定した際に、児童に任せることに対して不安を感じる事があればお答えください。できるだけ具体的に記入してください。(複数でもかまいません。)」

- (2) アクティブ・ラーニングに対する不安を持つ教員の授業スタイル、授業後のリフレクションの発話がどのように変化していくか分析する。授業スタイルについては、教師主導時間と生徒活動時間を秒単位で計測した。教師活動時間と生徒活動時間の定義については、小林ら (2007) ⑦の教師主導時間と子ども活動時間の定義に準拠する。定義は、次の通りである。

教師主導時間

教師主導時間とは子どもが座席や定位置において、教師が学級の子ども全体を対象として発話している時間。グループ学習の成果を班ごとに発表する時間や、教師の発話に対して子どもが挙手をして発言する時間も含まれる。

子ども活動時間 (生徒活動時間)

子どもが自由に活動する時間

IV 結果・考察

[分析 1]

表 1 は、アンケート調査「アクティブ・ラーニングを実践する場面を想定した際に、児童に任せることに対して不安を感じる事があればお答えください。できるだけ具体的に記入してください。(複数でもかまいません。)」の結果を分類したものである。59 人中 13 人回収し、回収率は 22% である (11 月 22 日現在)。

表 1 アクティブ・ラーニングに対する不安

分類	教授	入試	人間関係	その他
数	10	3	4	2

高等学校の教員におけるアクティブ・ラーニングに対する不安として、教授に関するものが最も多かった。

[分析 2]

表 2 は、アクティブ・ラーニングに不安を持つ教員の授業スタイルを教師主導時間と生徒活動時間に分けたものである。

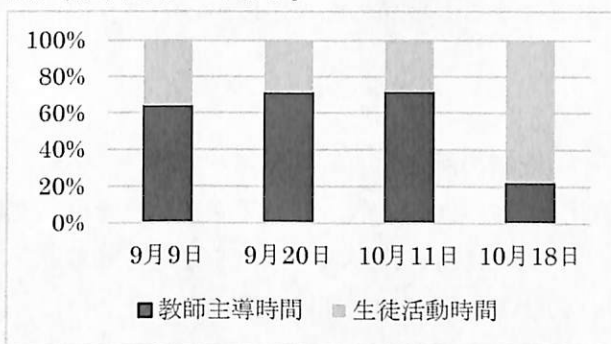


図 1 教師主導時間と生徒活動時間

アクティブ・ラーニングに不安を持ちながら、取り組む教員の授業スタイルは、徐々に生徒活動時間が確保されていく変容を見せた。その要因として、担当教員とのリフレクション時の話を質的に分析した結果、生徒の有能性を実感すると変容することが明らかとなった。

※詳細については当日発表する。

V 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」, 2014.
- 2) 西川純：「すぐわかる！できる！アクティブ・ラーニング」, pp.30-31, 学陽書房, 2015.
- 3) 西川純：「『学び合い』スタートブック」, pp.42-43, 学陽書房, 2010.
- 4) 岩崎大樹, 水落芳明, 西川純：「『学び合い』授業における学習者の意識と行動, 教師の『学び合い』への不安をもとに」, 臨床教科教育学会誌, 第 8 巻, 第 1 号, pp.41-56, 2008.
- 5) 山田純一, 西川純：「子どもの有能性を実感した教師の変容」, 臨床教科教育学会誌, 第 7 巻, 第 1 号, pp.103-126, 2007.
- 6) 前掲書 4)
- 7) 小林千鶴, 西川純：「子ども同士の『学び合い』を促す教師に関する研究」, 臨床教科教育学会誌, 第 7 巻, 第 1 号, pp.17-54, 2007.